



Save the Children

セーブ・ザ・チルドレン ニュースレター

April 2018 No.72



特集 教育支援

すべての子どもに  
学ぶ機会を

国内避難民キャンプの臨時学習所で学ぶイラクの子どもたち

© Gabriele François Casini/Save the Children

## 特集 教育支援

# すべての子どもに 学ぶ機会を

世界では、6歳から17歳の子どもの6人に1人(2億6,300万人)が学校に通っていません\*。これは、先進国の子どもの人口2億4,500万人よりも多い人数です。なぜ、学ぶ機会が奪われているのか、そして、セーブ・ザ・チルドレンはどのような支援を行っているのか、子どもたちの声とともにご報告します。

\*UNESCO (2016)

## 学ぶ機会が 奪われるのは なぜ？

さまざまな課題が複合的に絡み合い、子どもたちの学びに影響を与えています。

### 紛争

安全であるはずの学校が、攻撃で破壊されることがあります。避難のため、学校に通えなくなる子どもたちもいます。

### 「女の子」だから

世界中で1,500万人の少女が、一度も小学校に通っていません。この数字は少年の1.5倍にあたります。

### 貧困

貧困のために、児童労働や早婚を強いられ、十分な教育を受けられない子どもたちがいます。

### 場や人材の不足

学校が遠すぎて通えないというケースや、学校に行けても、教員の質の問題で十分な学びが得られないケースも。

攻撃を受け破壊された、シリアの学校の教室。紛争下のシリアでは、3校に1校の学校が爆撃などの被害を受けています。



© Mohammed Awadh/Save the Children

## 「私は今、ペンすら持てなくなりました」

空爆で重傷を負ったイエメンのノーランさん(13歳)

中東のイエメンでは、2015年3月に武力衝突が勃発して以降、暴力や飢餓、コレラなどにより、約2年半の間に数千人の子どもたちが犠牲になりました。

ノーランさん(13歳)は、空爆による爆風で突き飛ばされ、脊椎を痛めたため、車椅子の生活を送っています。公務員である父親が、ノーランさんを含め子ども8人を一人で育てていますが、約1年半の間給料は支払われておらず、苦しい生活が続いています。

### ノーランさんからのメッセージ

「私はこれまでは、歩いて学校に通っていましたが、今は、歩いて通うことができず、車いすで通っています。これまでは、椅子に座り、机に向かって書くことができましたが、今は、何か書こうとすると、背中のがのために手が痛みます。私は、書くことが大好きでしたが、今は、ペンすら持てなくなりました。私は、世界中のすべての人たちに対し、私やイエメンのすべての子どもたちのために、この紛争をやめるよう訴えます。

**私たちには、教育を受ける権利があります。**

私たちには、明るい未来を築く権利があります。

さらに多くの子どもたちに、私のようにけがをしてほしくありません。こんな不公平なことはありません。子どもたちが、私のようにならないことを望みます」

# 子どもを誰ひとり取り残さない。セーブ・ザ・チルドレンの教育支援

イエメン、シリアほか 紛争下の子どもたちが学ぶ機会を奪われないように。



学習支援センターで文字の書き方を学ぶ子ども



セーブ・ザ・チルドレンが支援する学校で学ぶシリアの子どもたち

## 4人に1人が学校に通えていないイエメンで 学習支援センターを運営

紛争の影響で学校に通えなくなった国内避難民の子どもたちや、避難民を受け入れている地域の子子どもたちが学べるよう、「学習支援センター」を運営しています。正規の学校に戻るまでの間、アラビア語や算数、理科などの学習を支援しています。

## シリアでは3校に1校が紛争の被害に ストップ! 学校への攻撃

紛争下では攻撃の対象になることや、軍の拠点として使用されることもある学校。そのような状況に対し、学校を攻撃や軍事利用から守るよう、世界73ヶ国が「学校保護宣言」に調印しています(2018年2月時点)。



【保護者の声】空爆があり、子どもを遠い学校に通わせるのが心配でした。近くにこのセンターができて、安心して子どもを通わせられるようになりました。



【セーブ・ザ・チルドレンの提言】日本を含むより多くの政府が「学校保護宣言」に署名し、紛争下であっても子どもたちに教育の権利を保障することが求められます。

## 日本 成長や学びの機会が環境に左右されないよう、給付金を通して支援。

災害で家計にダメージを受けた世帯や、経済的に困難な状況下の家庭の子どもたちを支援。入学時の制服代や、修学旅行の費用などを給付金で支えています。2017年は約2,000人の子どもたちを支援することができました。

### 【給付金を受給した新高校1年生の保護者の声(岩手県)】

震災で家屋を失いました。就職先も変わり収入も減りましたが、なんとか生活をしてきました。今は仮設住宅に住んでいますが、来年度は公営住宅に引っ越し、家賃も発生します。そういった中で、娘の高校入学に支援していただけるのは大変助かります。



日本では7人に1人の子どもが相対的貧困下に

(一部抜粋、編集しています)

## モンゴル

遠隔地の子どもたちが、スムーズに小学校生活を始められるように。



1

広大な大地に暮らす、遊牧民の少年アンハーさん(6歳)。町の子とも異なり、小学校へ入る前に学ぶ場はありません。



2

小学校に入学してからスムーズに学習を始められるよう、セーブ・ザ・チルドレンは、家庭で入学準備の学習ができる教材を提供しています。



3

数の数え方や色の名前、本の読み方などを、楽しみながら学ぶことができる教材が1箱に詰められており、複数の家庭で順番に使います。



© D.Davaanyam/Save the Children

4

小学校に入学したアンハーさん。幼稚園に通っていた子どもたちとともに、スムーズに小学校生活を始めることができました。

5

今日から授業が始まります。セーブ・ザ・チルドレンは政府などと協力し、1年生向けの分かりやすい副教材の開発も行ってきました。

6

1年生から親元を離れて寮で暮らす、アンハーさん。不安な子どもたちを支えるために、寮で放課後の居場所を開いています。

# 子どもの体やこころを傷つける罰のない社会を目指して

## 子どもに対するしつけのための体罰等の意識・実態調査結果

しつけのために子どもをたたくことは、決してすべきではない？他に手段がない場合はやむを得ない？

セーブ・ザ・チルドレンは、子どもに対するしつけのための体罰等に関する意識・実態調査を実施し、その結果を発表しました。

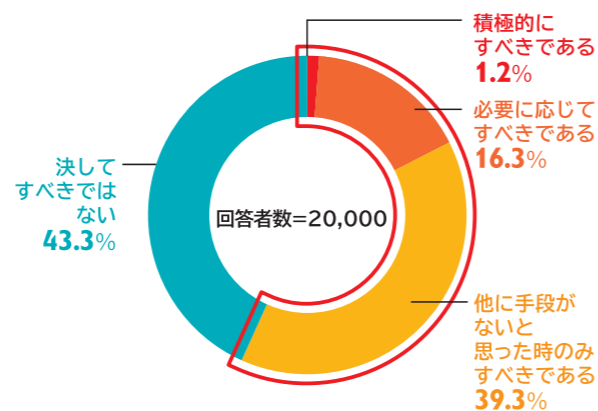
### 大人の約6割が体罰を容認

全国2万人の大人を対象とした意識調査の結果から、子どもに対するしつけのための体罰を容認する人が56.7%にのぼる一方で、子どもに対して体罰を決してすべきではないと考える人が43.3%にとどまっていることが分かりました。

さらに、しつけのために体罰を用いることを「決してすべきではない」と回答した43.3%の中でも、お尻をたたく・手の甲をたたくといった罰や、怒鳴りつける・にらみつけるなどのこころを傷つける罰については、容認する人が一定数存在しました。

2万人のうち、子育て中の親や養育者1,030人を対象に、体罰等に関する実態調査も実施しました。その結果、70.1%の子育て中の家庭において、過去にしつけの一環として子どもをたたいたことがあるということがわかりました。

しつけのために、子どもに体罰をすることに対してどのように考えますか。(単一回答)



※本文およびグラフの数値は、その表章単位に合わせて計算された数値を四捨五入しています。

**体罰:** 殴る、たたく、蹴るといった有形力を用いる罰 **体罰等:** 左記体罰、および、怒鳴りつける、「だめな子だ」と言う、にらみつけるといった子どものこころを傷つける罰の総称

### 自身が体罰等を受けた経験との関係

親や身近な大人からたたかれたことがあると回答した人は、その経験がないと回答した人に比べ、自身の子どもをしつけの一環でたたいたことがあったと答えた割合が比較的高い結果が出ました。一方で、たたかれたことが「全くなかった」という人でも約6割が、自身の子どもに対して、たたいたことが1回以上あったという結果になりました。

また、たたかない、怒鳴らない子育てについての意識を質問した結果からは、子育て中の回答者の約6割が、体罰等によらない子育てをしたいし、その方法も知っているが、実践は難しいと感じる、あるいはそのような子育て方法を知りたい、と考えていることがわかりました。

### 回答者がたたかれた経験と過去に子どもをたたいた実態との関係性

		あなたは過去に、しつけの一環として子どもをたたいたことがありますか。			
		日常的にあった	時々あった	1~2回あった	全くなかった
全体 1,030		1.9	37.0	31.2	29.9
あなた自身、親や身近な大人からたたかれたことはありますか。	日常的にあった	5.3	47.9	18.1	28.7
	時々あった	2.7	46.1	29.7	21.5
	1~2回あった	29.7	46.1	37.8	32.5
	全くなかった	1.1	23.9	33.0	42.0

Point: たたかれた経験が「全くなかった」という回答者でも、約6割が子どもを1回以上たたいた経験がある。

### 体罰等は決して許されない

体罰等は子どもの権利を侵害する行為であり、どんなに軽いものであっても許されません。また、体罰等は子どもの発達に負の影響を与えることが、さまざまな科学的根拠を伴ってすでに明らかになっています。家庭を含むあらゆる場面での子どもに対する体罰等をなくすための取り組みが国際社会で進む中、日本でもそのような取り組みの推進がより一層求められます。

セーブ・ザ・チルドレンは、家庭を含むあらゆる場面での子どもに対する体罰等をなくすために、これからも、法改正に向けた政策提言、体罰等によらない子育ての重要性を訴える社会啓発、「ポジティブ・ディシプリン」プログラムを通じた親や養育者に対する支援に取り組んでいきます。

## 体罰等をなくすための3つの提言

セーブ・ザ・チルドレンは、体罰等を決して容認しないという認識を社会全体に広め、体罰等によらない子育てを推進すべく、社会啓発、法改正および親や養育者への支援の3点について、以下の通り国や地方自治体に対して提言します。

#### 提言1

子どもに対する体罰等を容認しない社会をつくるために、啓発活動を推進すべきである。

#### 提言2

家庭を含むあらゆる場面での子どもに対する体罰等を、法律で禁止すべきである。

#### 提言3

親や養育者が体罰等によらない子育てを実践するための支援をさらに拡充すべきである。



調査結果レポートはこちら  
[http://www.savechildren.or.jp/jpnem/jpn/pdf/php\\_report201802.pdf](http://www.savechildren.or.jp/jpnem/jpn/pdf/php_report201802.pdf)

# ロヒンギャの 子どもたち

決して忘れられない恐怖の中で

2017年8月25日以降、ミャンマー・ラカイン州北部における人権侵害を逃れ、隣国バングラデシュに68万人以上のロヒンギャの人々が避難しています(2018年2月時点)。その約6割を占めるのは子どもです。親が殺されるのを目撃する、性暴力の被害に遭う、家が焼き討ちされるなど、凄惨な体験に直面してきた子どもたちも少なくありません。インタビューを通して語られた子どもたちの声と、セーブ・ザ・チルドレンが行っている緊急支援をお伝えします。

## ある16歳の少女の体験

「台所にいた時に銃声が聞こえ、兵士たちが村の家々を燃やし始めたのが見えました。私はジャングルに逃げ込みました。兵士が銃でたくさんの人を殺しているのが見え、私も見つけられて殺されるのではないかと、とても怖かったです。私たち家族は、3日間夜通し歩き続けて、バングラデシュへ逃げました。その間食べたのは、ジャングルの葉っぱだけです。今は毎晩冷たいビニールシートの上で寝て、怖い夢を見ている。ミャンマーの家が恋しいです。」



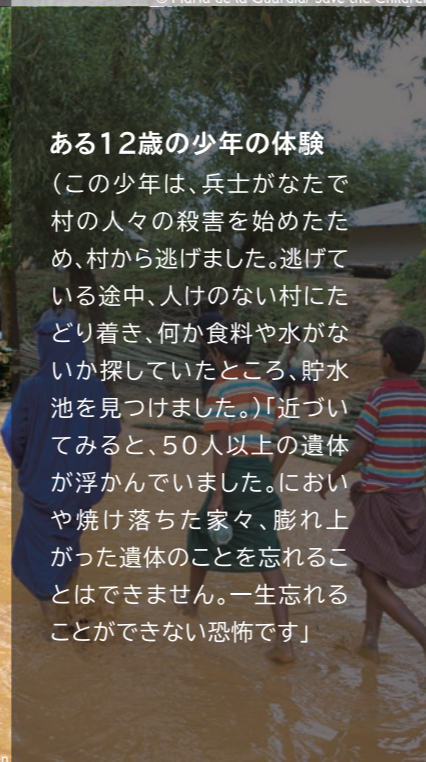
© Maria de la Guardia / Save the Children



© Maria de la Guardia / Save the Children

## ある12歳の少年の体験

(この少年は、兵士がなたで村の人々の殺害を始めたため、村から逃げました。逃げていく途中、人けのない村にたどり着き、何か食料や水がないか探していたところ、貯水池を見つけました。)「近づいてみると、50人以上の遺体が浮かんでいました。においや焼け落ちた家々、膨れ上がった遺体のことを忘れることはできません。一生忘れることができない恐怖です」



## バングラデシュにおけるロヒンギャの人々への緊急支援

2017年8月以降、バングラデシュ・コックスバザールにおいて、ロヒンギャの人々約62万人に支援を届けてきました。この地域での支援で中心的な役割を果たす団体の一つとして、1,600人以上のスタッフとボランティアが現地で支援に取り組んでいます。



© GMB Akash/Panos Pictures/Save the Children

### 物資の支援

多くの人々は着の身着のまま避難キャンプに到着します。これまでに、米やレンズ豆などの食料を約60万人に届けたほか、シェルターキットを26,833家族、衛生用品を25,160家族、調理器具セットを27,492家族に提供しました。冬季には、毛布や衣類などの防寒支援も行いました。



© Rik Goverde/Save the Children

### 保健・栄養

コックスバザールに避難してきた5歳未満の子どもの6人に1人が、急性栄養不良の状態に陥っています。経験豊富な医師や助産師が勤務するコミュニティーヘルスポスト(簡易的な診療施設)を9ヶ所で運営し、毎日約1,000人を診療しています。



© Turijoy Chowdhury/Save the Children

### 子どもの保護

子どもたちや少女たちが安心して過ごせる空間を86ヶ所開設し、47,000人以上の子どもを支えてきました。セーブ・ザ・チルドレンは、心理社会的支援を提供するほか、子どもの状況に応じてメンタルヘルスの専門機関などへとつないでいます。



© Hanna Adcock/Save the Children

### 教育

教科書や文房具などの学習キットを提供するほか、4歳から14歳の子どもたちのための学習所を100ヶ所以上運営し、教育の機会を提供しています。写真右のサジダさん(12歳)は、「読み書きを習えるようになりました。新しい友達も好きです」と話します。

# PARTNERSHIP INFORMATION

## Interview

“For the Next Generation”  
次世代への支援を、ともに。

## SONY

ソニー株式会社  
広報・CSR部 CSRグループ ゼネラルマネジャー  
シッピー 光 様



### 創業の理念を受け継ぐ

創業者の一人である井深 大は、社会に対して価値ある存在の会社となることを目指し、ソニーを設立しました。この理念は今も受け継がれ、私たちのCSR活動の原点になっています。そして今、日本のみならず全世界のソニーが、“For the Next Generation”の精神のもと社会貢献に取り組んでいます。この想いに、子どもの権利を重視したセーブ・ザ・チルドレンの活動は重なり合うところが多いのです。

### 国内外の災害に迅速に対応できるように

東日本大震災後に共同で立ち上げた「RESTART JAPANファンド」では、被災地の子どもたちの文化・スポーツ活動のサポートや科学教育活動など、さまざまな支援を行ってきました。このファンドは、ソニーだけでなく、多様な企業が参加できるプラットフォームであることが大きな特長でした。この経験を活かし、国内外の災害に迅速に対応できるよう、2016年、「子どものための災害時緊急・復興ファンド」を共同設立。これにより、熊本地震やメキシコ地震で迅速な支援につなげることができました。

### 企業とNGOの新しいパートナーシップの形を

セーブ・ザ・チルドレンが持つ、現場の活動に根差した知見には、いつも学ばせていただいています。日本の子どもの貧困に関する調査を説明していただいた際には衝撃を受けました。また、セーブ・ザ・チルドレンは常に新しい協働の形を提案してくれるので、私たちにとっても大きな刺激になっています。これからも、お互いが持つ強みやノウハウを活かし、グローバルに連携を強化していきたいと思っています。

## Information

### DEAN & DELUCA

世界の子どもたちに  
「おいしい」を届けよう。



食のセレクトショップDEAN & DELUCA(株式会社ウェルカム)は、毎年11月から12月に、「食するよろこびを世界の子どもたちへ」をテーマにチャリティーキャンペーンを実施。限定トートバッグの売り上げの一部を、ベトナム北部の山岳地帯に暮らす少数民族の子どもたちの栄養改善のためにご寄付いただいています。



子どもたちが元気に遊ぶ姿を  
世界中で守るために。

子ども用のペダルなし二輪車「ストライダー」の日本正規輸入元である株式会社豆魚雷からは、セーブ・ザ・チルドレンのロゴ入りストライダーの販売1台ごとに1,000円のご寄付をいただいています。「子どもたちが元気に遊ぶ姿を世界中で守りたい」という想いがこもったご寄付は、日本国内と海外の幅広い活動に役立てられています。



ヘアデザイナーとともに  
子どもたちの笑顔を支えたい。

シャンプーやヘアカラーなどの美容室専売ヘア化粧品メーカーの株式会社ミルボンには、2002年よりヘアデザイナー向けのイベント、講習会の参加費の一部からご支援いただいています。2018年は株主優待制度からのご寄付も予定されています。ご寄付は世界と日本の子どもたちの今と未来を守るための活動に幅広く役立てられています。

## スタッフの一日

レバノン駐在員 西口 祐子



シリア紛争から逃れ、レバノンで暮らすシリア難民の子どもたちを、暴力、児童労働、早婚などの被害から守る活動を行っています。

### レバノンってどんな所？

地中海に面し、シリアとイスラエルに隣接しています。2011年のシリア危機以降150万人の難民を受け入れており、人口450万人に対し、世界一難民の割合が高い国であるといわれています。



出勤 08:30  
難民居住区へ 09:00

レバノン南部の難民居住区で、地域のボランティアと子どもの保護の問題について協議。「何か問題があれば、いつでもセーブ・ザ・チルドレンに相談してくださいね。」



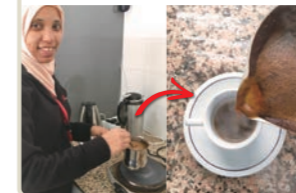
事務所で会議 13:30

深刻な児童労働の問題をどう予防するか、そのためにどのような情報を保護者に提供すべきか、チームで議論します。



朝の挨拶は「キフィー」  
(アラビア語のHow are you?)

毎朝欠かせないのが、レバノンコーヒー。いつも私たちの仕事をサポートしてくれるサラさんの笑顔も欠かせません。



12:30 ランチ@事務所

この日のメニューは、肉団子のヨーグルトシチューと、ごはんと揚げ麵を混ぜたものです。レバノン料理は何を食べてもおいしい！日本料理の次に好きです。



シリアのパネル展を  
開催した大学生  
グループからの声



この度は、私ども津田塾大学ピースアートプロジェクトによる企画展「シリア内戦と子ども」に、資料やパネルをお貸し出しいただき、ありがとうございました。幅広い年代の方々が登場し、熱心に見入っていました。今回の企画にあたり、学生である私たちにできることは何かと思索する中で、貴団体の大変読み応えのあるレポートに出会い、多くの方々にシリアの子どもの声を伝えたいと思いました。マスメディアからだけでは分らなかった人々の営みが、子どもたちの声を通して少しでも来場者に伝わっていれば幸いです。



パネル展は2017年11月に開催されました

## 気軽にできる支援のご紹介

レストランでの  
食事で世界の  
子どもたちを支援



「Gochiso」のサイトからレストランを予約すると、食事代の最大20%がセーブ・ザ・チルドレンへの寄付になります。

詳しくはウェブサイトをご覧ください。

<https://gochiso.jp/>

※ご利用の際は寄付先にセーブ・ザ・チルドレンをご指定ください。

## セーブ・ザ・チルドレンの ソーシャルメディアを チェック!

世界中の子どもたちの今や、セーブ・ザ・チルドレンの活動、イベント情報などを、ソーシャルメディアで発信しています。フォローや「いいね!」で、タイムリーな情報を受け取ってください。



Instagram 【インスタグラム】  
savethechildren\_japan



Facebook 【フェイスブック】  
SCJ.SaveTheChildrenJapan

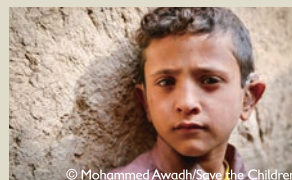


Twitter 【ツイッター】  
scjapan

## 報告書『子どもに対する戦争』を発表

世界では、3億人以上の子どもが紛争下に暮らしています。

セーブ・ザ・チルドレンは、報告書『子どもに対する戦争:武力紛争下の子どもたちへの暴力を終わらせる』を発表しました。現在、世界では少なくとも3億5,700万人の子どもが、紛争下に暮らしています。



© Mohammed Awadh/Save the Children



セーブ・ザ・チルドレンは、紛争下の子どもたちの生活に影響を与える国、軍およびすべての当事者に対し、下記について具体的な行動を取ることを求めています。

- 子どもを危険な状況下に置くことの防止
- 国際法、国際基準の遵守
- 違反者に対する処罰
- 被害を受けた子どもたちの人生の再建

詳しくはウェブサイトをご覧ください。

## 支援活動に ご協力ください

あなたの気持ち、届けます。

「勉強したい」「友達と遊びたい」  
“当たり前”が奪われた子どもたちのために。  
例えば約5,000円で、  
臨時学習所で1年間学ぶために必要な、教科書や文具、制服のセットを提供できます。



© Mike Sunderland/Save the Children



子どもの危機の  
最前線にあなたの思いを  
届けます

### 編集 後記

「小学校の給食、一番好きだったメニューは？」昨年実施したイベントで、参加者同士がこの答えを話しながら自己紹介をしました。「何と言っても揚げパン!」「ソフト麺、好きだったなあ」。予定の時間を過ぎて、世代を超えて楽しい時間を思い出す話が尽きませんでした。シリアなど紛争地で暮らす子どもたちは、大人になったらどのような学校生活を思い出すのか。すべての子どもにとって学校が安心できる空間となるよう、私たちの活動は世界中で続きます。(編集担当:高橋)



Save the Children

www.savechildren.or.jp

セーブザチルドレン 検索



セーブ・ザ・チルドレンは、日本を含む世界120ヶ国で子ども支援活動を行う、民間・非営利の国際NGOです。子どもの権利が実現された世界を目指し、約100年にわたり活動しています。

\*この冊子の印刷におきましては、協和オフセット印刷株式会社にご協力をいただきました。

この冊子は、適切に管理されたFSC®認証林からの原材料および、再生資源やその他の管理された原材料から作られた、環境配慮型のFSC®認証紙を使用しています。



Save the Children

セーブ・ザ・チルドレン ニューズレター No.72 2018年4月発行 発行元:公益社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン  
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F ご支援に関するお問い合わせ: 03-6859-0068(平日9:30~18:00)